# 『麓草分』と『破吉利支丹』

## ――無窮会蔵鈴木正三関係資料の一考察――

三浦　雅彦

## 一、序

これまで私は鈴木正三（一五七九～一六五五）の関係資料の研究に従事してきたが、『国書総目録』に無窮会専門図書館所蔵として正三の『万民徳用』『盲安杖』『麓草分』『破吉利支丹』等の著作があるとされるので調査を実施した。そのとき神習文庫の『破吉利支丹』の表紙裏見返しに次の書入れがあることに気づいた。

「破吉利支丹、でうすものかたり／鈴木九太夫先祖、正三之作也。

鈴木正三、心学ノ根本其著モ亦數多、所謂、萬民徳用、盲安杖、驢鞍橋等ノ作者、慶安明暦年間ノ人。三河ヨリ出府ノ路次、箱根山ニテ山賊恵中ニ逢ヒシ談ハ世ノ知ル処ナリ。子孫連綿、幕府ニ奉仕シ、四百五拾石ヲ知行シ、駿河臺鈴木町ニ住ス。鈴木町ノ名コレニヨリテ起ル」

『でうす物語』は正三の著作として書籍目録等に見えるが、管見の限りでは現存が確認されていない。また恵中が山賊だったという話もここで初めて見たのであるが、江戸風俗の研究家三田村鳶魚の『江戸の白浪』（初出一九三三年）に次のような話がある。

「慶安元年の話ですが、二王座禅を首唱して江戸に名高い鈴木正三……この正三老人が七十の時、故郷の三州から江戸へ出てまいります途中に、箱根山へさしかかりますと、そこに大勢の山だちがいた。夏の夜深く

正三老人は、平気で箱根を越えてまいります。山だちは抜刀してそこへ出てきて、持っているものを皆よこせという。正三老人は戦場生残りの古武士ですから、年は取っていても、山賊などに驚く人でもありませんが、くれろというならやろうと言うと、たちまち素裸になって、衣類から路用から全部与え、やる物も取る物も何もないようにして立ち去った。それから半道も行き過ぎて気がついたのは、どうしたはずみか、褌の間に小粒が二つ残っていた。皆やるといっておいて、これだけおれが残したようになってもおもしろくない。立ち戻ってこれをやってこよう、というので、老人が引っ返してみると、山賊どもは前のところにいる。正三は声をかけて、まだこれだけ残っていたが、皆やるつもりで残しては心持が悪い、これも取っておけ、と言って小粒を二つくれた。そうして老人がそこを立ち去ろうとすると、山賊の一人があとを追っ駆けてきました。これまで永年山賊をしてきたけれども、お前さんのような変な人はない、いかにも無欲な人だ、どうしてそういう風になれるか、と言って聞くと、正三は、それはなれないこともない、無欲になったところで仕方がないが、なりたければなることは出来る、という返事をした。それでは一つ自分を無欲にして貰いたい、ということになって、そういうことが因縁になって、この山賊の一人が正三の弟子になった。それが後に恵中といいまして、二王座禅の二代目になったという話がある」(1)

こうして恵中は山賊の出とされるが、それを事実と考えることはできない。その根拠として恵中撰『石平道人行業記辨疑』の次の記述がある。

「雲歩者豊前英産、幼而來二肥陽一。野衲（恵中）肥後生縁、相階十歳、而謁二本郡流長院圍岩禪師一。行年十三、同日髯染、十有九而與起臻二乎坂東一、經二叢林一、已三霜終俱辭二世僧學一、而參二石平（正三）和尚一」(2)

信覚恵中（一六二八～一七〇三）は『石平道人外記』・『石平道人四相』・『石平道人行業記』等の正三伝を著したほか、仮名草子の『海上物語』等の著述を残し、さらに江戸の西禅庵や八王子の堅叔庵という寺庵を建立するなど、正三遷化後の仁王禅の展開に貢献したことで知られる。行巖雲歩（一六二八～九八）は片仮名本『因果物語』を撰した後、熊本藩主細川綱利の帰依を受け、熊本

藩領の豊後に能仁寺、肥後に天福寺を開創し、その下に二〇余の末寺を擁して豊肥二国に一大勢力を築いた。

恵中は雲歩と同門の弟子で、一〇歳のとき共に肥後流長院の囲巖宗鐵（？～一六五一）に謁し、一三歳のとき出家、一九歳のとき関東に出て各地を遍歴した後、正三に参じたとされる。雲歩の伝によれば、彼が囲巖の弟子となったのは九歳で、一三歳のとき出家して宗元と称したが、正保三年（一六四六）一九歳の春に雲歩と名を改め、「この年雲歩は師の聽許を得て、法弟恵中、麟藝、周欣の三名と共に關東遍歴の途に上り、三月江戸に着きて牛込金鳳山天徳院に掛錫せり。ここに留ること四年、其の間然室和尚に就て歸禪する處ありしが……慶安二年（一六四九）秋の頃より石平正三禪師に親炙し、爾後禪師の示寂するに至るまで約六年間熱心修道して、二十八歳の明歴元年（一六五五）十月熊本に歸れり」[3]とある。

それゆえ恵中が箱根山で山賊をしていたというのは俗説に過ぎず、事実ではないのである。なぜこうした俗説が流布したか疑問であるが、ここでは右の事実を確認するにとどめたい。

ところで『国書総目録』には『万民徳用』の所蔵先として無窮会織田文庫が含まれるので、私は以前その調査を行い、諸本の分類・整理を実施した。その結果、『万民徳用』の刊本にはA～Gの七系統が確認され、その中で織田文庫本は出雲寺文次郎以下の七書肆の共同刊行したE系統のものと判明した。E系統の刊行年代は確定できなかったが、「忍阿」なる人物の署名入りの跋文があり、それを手がかりに調べたところ、安政三年（一八五六）、文久二年（一八六二）、明治元年（一八六八）に刊行された例があることがわかった[4]。

無窮会には正三の七部書のうち四点が所蔵で、正三最初の著作とされる『盲安杖』の研究については別稿を予定している[5]。本稿に関連する限りでその要点を記すと、織田文庫の『盲安杖』は山本長兵衛・脇坂仙治郎・すみ屋勘兵衛の三書肆の共同刊行で、石門心学者の手島堵庵（一七一八～八六）の安永七年（一七七八）の序文があるものである。『盲安杖』は慶安四年（一六五一）に刊行されたほか、合計一一系統の版種があるが、注目すべきは同書が堵庵など石門心学関係の著作を刊行した書肆によって多く刊行され、織田文庫本もその一つだったことである。

こうしてこれまで私は『万民徳用』と『盲安杖』を研究してきたのであるが、ここではまだ未検討の『麓草分』と『破吉利支丹』に注目し、無窮会所蔵本を含めた諸本の整理・分類を行い、正三の生存年代に近い刊本を確認することにしたい。以下の二では『麓草分』の成立年代を明らかにした上で、同書における平仮名本と片仮名本の問題を検討することにする。そして三では『破吉利支丹』の成立の契機となった正三の天草での活動を再検討し、あわせて諸本の整理・分類を行うことにする。

## 二、『麓草分』における平仮名本と片仮名本の問題

### （1）寛永一三年成立説の再検討

正三遷化の五年後に刊行の『驢鞍橋』によれば、「師述ル所ノ書、萬民徳用、麓草分、盲安杖、二人比丘尼、念佛草紙、破キリシタン、因果物語等也。以上ノ七部ハ三寶ノ光ヲ以テ国土ヲ照シ、普ク群生ヲ度セント欲ス。師大願ノ至要也」[6]とあり、『麓草分』は正三の主著とされる『万民徳用』に次いで重要な書とされた。そのことは「我云フ程ノ事ハ徳用・草分等ニ書クアリ。アノ外ハ云フ事無シ、是ヲ好ク見ラルベシ」[7]という正三自身の言葉からもわかる。しかしこれまでの正三研究では、主著の『万民徳用』や語録の『驢鞍橋』に比べ、『麓草分』への関心は薄く、その成立についても十分な研究がされているとは言い難いのが現状である。

ところで七部書という正三の著作がいかにして成立したかは、現在の正三研究の定本の鈴木鉄心編『鈴木正三道人全集』（以下『鉄心全集』）の解説で、「…内容からいっても、著者からいっても、最も信を置くに足るべき伝記」[8]とされた恵中撰『石平道人行業記』（以下『行業記』）の記述をもとに通説が形成されてきた。その『行業記』によれば「又至二丹州瑞巖一、即隨二萬安禪師之請一、著二麓草分上下篇一」[9]とある。

すなわち『麓草分』は、道元最初の道場である京都深草の興聖寺の中興開山で、また学僧としても「万安抄」と言われる祖録の注釈書を多く刊行した曹洞宗の万安英種（一五九一～一六五四）の要請で執筆されたというのである。『行業記』にはその成立年代が明記されないが、『鉄心全集』三四七頁の「正三道人略年譜」によれば、

寛永一三年（一六三六）の記事として「（正三）五十八歳、万安、丹波瑞巖寺再興、師、ユイテコハレテ麓草分上下篇ヲ著」とあり、『麓草分』の成立はこの年とするのが現在の通説となっている。その根拠は、万安伝を収録する『続日域洞上諸祖伝』によれば、「丙子秋遊二丹波一、偶有二廢寺一曰二瑞巖一。師愛二其閒寂一、僦居數年」[10]とあり、万安が瑞巖寺を再興したのは寛永一三年とされるので、『鉄心全集』はこれに依拠したと思われるのである。

また右の万安伝によれば、正保二年（一六四五）に鈴木不白居士（正三の実弟重成）の勧めで摂津の臨南寺に移っている[11]ので、万安が瑞巖寺に住したのは寛永一三年から正保二年の約一〇年のことである。これについて私は以前『麓草分』を検討し、同書には正三が寛永一六年（一六三九）六一歳の開悟以降に得たと思われる「見性の相対化」という視点が見られることから、「『麓草分』は正三開悟の寛永一六年から正保二年の間に執筆されたと見るのが妥当だと思われる」としたことがある[12]。

ところが松田唯雄の『天草近代年譜』（以下『近代年譜』）を見ると、寛永二〇年（一六四三）是春の記事として「代官鈴木重成上府す、縷々郡状を陳じ、寺社領寄與方を具申せんが爲めなり」とあり、また正保元年（一六四四）是夏の記事として「代官鈴木重成、江戸より歸着在陣す」[13]とあるが、その後の正保二年に重成が瑞巖寺を訪れたという記述はない。『近代年譜』は記事の根拠の一次史料が示されないため、参照する際には注意を要するが、万安が瑞巖寺にいる間に著されたという『麓草分』の成立年代は、なお検討の余地があると思われるのである。

## （2）平仮名本と片仮名本の諸本

これまで私は『国書総目録』を出発点として、全国の大学・図書館等の正三関係資料を探索する作業に従事してきた。その際、『麓草分』も同目録に記載された所蔵先一五機関の調査を実施し、可能な限り原本を実見してきた。同目録によれば『麓草分』は二巻二冊とされ、明暦二年版三点、寛文七年版一点、寛文年間版一点、寛政七年版一点、刊年不明一一点の所在が示され、その中で私が確認できなかったのは戦災で焼失の旧彰考館文庫と横山重の所蔵本の二点だけだった。

ところで『行業記』は『麓草分』を「上下篇」の二巻本としたが、「寛文無刊記目録」は同書を一冊とし、「寛文十年刊書籍目録」と「寛文十一年刊書籍目録」では二冊としていた[14]ので、早くから二種の刊本があったことがわかるが、他方で同書には平仮名本と片仮名本とがあることも判明している。

『鉄心全集』三三五頁の解説によれば、「此書の刊行されたのは、明暦二年版（堤本か）と、それを重版した山本平左衛門版（寛文版）と、それを更に重版した寛政七年版。須原本と、その再版の松会版、外に岡田嘉七本、明治の守永氏校正版等がある。全集には、寺蔵の寛文版を採った。この寛文版は、片仮字本（ママ）であるが、印刷の都合で、平仮字（ママ）になったことは、特にお断りしなければならぬ」とある。右の解説では平仮名本と片仮名本の区別がなく、いずれが先に刊行されたのかも不明だが、同全集三四九頁の「正三道人略年譜」によれば、正三遷化の翌年の明暦二年に「麓草分初刊」とある。管見の及ぶ限りではこれが平仮名本のことで、その諸本をまとめたのが【図1】である。

私は【図1】の刊本二〇点を基本的にすべて実見し、その版種を右のA～Cの3系統に分類した。その際、可能な限り所蔵先の請求記号を付し、『国書総目録』から所在の変更があった場合は現在の所蔵先を記した。ただ②は原本が紛失とのことで、国文学研究資料館のマイクロ資料によって書誌情報を得た。

A系統の平仮名本は二種あり、A1の村上平楽寺板の刊記には「明暦二稔丙申一一月吉日開」、A2の秋田屋（山本）平左衛門板には「明暦二丙申仲夏吉辰」とあるが、『鉄心全集』が底本としたのは片仮名本の山本（寛文）板で、A2とは異なる。また『鉄心全集』は明暦二年刊の「堤本」の存在を推定したが、管見の限りでは堤板は片仮名本だけである。また刊行年月を一見し、A2がA1より先行するかに思われるが、A2の刊記は上巻末に後から入れられたものと見られ、実際の刊行年代を遡って追加された可能性が高い。それゆえ現時点ではA1の①を平仮名本の初刊とするのが妥当と考えられるのである。

次に刊行されたのはB系統の松會板で、B2は刊年が削られるが、B1には「寛文丁未年菊月吉日」とあり、寛文七年（一六六七）刊行とわかる。またB系統の上下巻の題箋は、⑥⑦⑧⑩で「新板ふもと乃草分　上」、⑤⑥

【図１】平仮名本『麓草分』の諸本

| 分類 | 書肆／刊行年月 | 巻・丁 | 所蔵先(請求記号、旧は『国書総目録』) |
|---|---|---|---|
| (A1) | 村上平楽寺／明暦二年一一月 | 上二〇・下一六丁 | ①名古屋大学附属図書館岡谷文庫(一八八・五―H) |
| (A2) | 秋田屋平左衛門／明暦二年五月(上巻末) | 上二〇・下一六丁 | ②京都大学文学部頴原文庫(pb―三八) |
| | | | ③同志社大学今出川図書館(一八八・八―S九五七三) |
| | | | ④草間文庫 |
| (B1) | 松會開板／寛文七年九月 | 上一四丁半・下一二丁半 | ⑤無窮会専門図書館織田文庫(二―オ―一九八三) |
| | | | ⑥草間文庫 |
| (B2) | 松會開板／ナシ | 上一四丁半・下一二丁半 | ⑦駒沢大学図書館(一八〇―一〇〇―一、二) |
| | | | ⑧早稲田大学図書館(ハ―五―一三四九―一、二) |
| | | | ⑨国立国会図書館(八五七―四六) |
| | | | ⑩お茶の水図書館成簀堂文庫 |
| (B3) | 須原屋平助／ナシ | 上一四丁半・下一二丁半 | ⑪駒沢大学図書館(一八〇―五三) |
| | | | ⑫早稲田大学図書館(ハ―五―一〇一四) |
| | | | ⑬石川県立歴史博物館大鋸コレクション(三九四―一八八・八―三) |
| | | | ⑭豊橋市中央図書館(和一八五―六) |
| | | | ⑮大倉精神文化研究所(エ九―一四三一) |
| (C) | 北畠(須原屋)茂兵衛／明治二三年三月 | 上二六・下二一丁 | ⑯駒沢大学図書館(一八〇―二一〇―一A、二A) |
| | | | ⑰駒沢大学図書館(一八〇―二一〇―一B、二B) |
| | | | ⑱国立公文書館(旧内閣文庫、一九三―五〇九) |
| | | | ⑲西尾市岩瀬文庫(一五二五五―一四五―九五) |
| | | | ⑳松ヶ岡文庫(クハ―五八三―一、二) |

⑦⑧⑨⑩で「新板ふもとの草分　下」と判読でき、再刊本であることが明瞭である。

Ｂ３は須原屋平助の再刊本で、ここは正三の『万民徳用』を刊行した書肆だが、私は同書に安永三年（一七七四）の書入れがあることから、同書の刊行をこの頃と推定したことがある[15]。またＢ系統は、一七段からなる『麓草分』の一五段と一六段が逆に印刷されている点が特徴的である。

最後にＣ系統は明治二三年（一八九〇）刊行だが、和装本である。北畠（須原屋）茂兵衛は同時期に『万民徳用』や『破吉利支丹』を刊行した書肆で、明治期になっても依然として正三の著作への需要があったことは注目に値する。

以上、本稿では平仮名本をＡ～Ｃの四系統に分類し、それぞれの版種の特

【図２】片仮名本『麓草分』の諸本

| 分類 | 書肆・刊行年月 | 巻・丁 | 所蔵先(請求記号、旧は『国書総目録』) |
|---|---|---|---|
| (D1) | 堤六左衛門／ナシ | 四〇丁 | ㉑駒沢大学図書館(一八〇―二五一) |
| | | | ㉒カリフォルニア大学バークレー校三井文庫 |
| (D2) | 山本平左衛門／ナシ | 四〇丁 | ㉓京都大学附属図書館(四〇―セ―一、『石平道人七部書』の一) |
| | | | ㉔駒沢大学図書館(一八〇―一〇一) |
| | | | ㉕関西大学総合図書館(L二四／三―八) |
| | | | ㉖恩真寺 |
| | | | ㉗カリフォルニア大学バークレー校三井文庫 |
| (D3) | 著屋儀兵衛／寛政七年一月 | 四〇丁 | ㉘駒沢大学図書館(一八〇―一〇一―A) |
| | | | ㉙豊橋市中央図書館橋良文庫(旧橋良、A一八〇―一四) |
| (D4) | 出雲寺文次郎・勝村治右衛門・河内屋喜兵衛・秋田屋太右衛門・須原屋茂兵衛・出雲寺萬次郎・岡田屋嘉七／ナシ | 四〇丁 | ㉚早稲田大学図書館(ハ―五―一六一四) |
| | | | ㉛禅文化研究所(Z五―八七二) |
| | | | ㉜松ヶ岡文庫(クハ―一七七) |
| (E1) | 物之本屋徳兵衛／ナシ | 上二三・下一九丁 | ㉝足利学校遺蹟図書館(一一―六四／一―一) |
| (E2) | 八文字屋仙治郎・炭屋文蔵／ナシ | 上二三・下一九丁 | ㉞大谷大学円光寺文庫(餘大六四二八―一) |
| | | | ㉟立正大学図書館(A七八―四一―一) |
| (E3) | 岡田屋嘉七・山城屋佐兵衛・須原屋茂兵衛・和泉屋善兵衛・須原屋伊八／弘化四年一一月 | 上二三・下一九丁 | ㊱駒沢大学永久文庫(旧永久俊雄、七四七九) |
| (F1) | 柳枝軒小川多左衛門／安政六年八月 | 上二一・下一八丁 | ㊲大谷大学図書館(餘大三二九四―一) |
| (F2) | 無刊記／ナシ | 上二一・下一八丁 | ㊳草間文庫 |

色を検討してきた。その中で無窮会本はB1系統に属し、寛文七年刊行の松會板と確認された。次に片仮名本の検討に移るが、片仮名本『麓草分』の諸本の一覧は【図2】にまとめた通りである。

私が実見したのは一八点の刊本で、「と」で国文研のマイクロ資料を利用したほかは、すべて原本を確認した。ここでも所蔵先と請求記号を記し、『国書総目録』記載の所蔵先の変更は反映させた。その結果、片仮名本は右のD～Fの三系統に分類された。

D系統は四〇丁の一巻本で、D1の堤六左衛門板、D2の山本平左衛門板、D3の著屋儀兵衛板と、D4の出雲寺文次郎以下の七書肆の共同刊行によるものとがある。『鉄心全集』の底本は「寛文版」とされていたD2の「だが、D2すべての刊本を実見しても、寛文

年間（一六六一～七三）刊行を示す刊記や書入れは確認できなかった。

堤六左衛門と山本平左衛門は正三の七部書を多く刊行した書肆で、管見の限りでは堤は正三の助縁者が刊行した片仮名本『因果物語』を除くすべてを、同じく山本は『万民徳用』を除くすべてを刊行している。よって堤板と山本板のいずれが先行するかが問題だが、『仮名草子集成』に収録された正三の『破吉利支丹』や恵中の『海上物語』の解説によれば、山本板は堤板の求板であるとされる[16]。ただ後世に流布したのは山本板で、Ｄ３とＤ４は山本平左衛門の刊記がそのまま残される再刊本である。

こうして片仮名本はＤ系統がもっとも多く流布したが、その一方で片仮名本にも二巻本が登場した。それがＥとＦの二系統である。Ｅ系統でもっとも古いと思われるのはＥ１の物之本屋徳兵衛板で、その活動年代は寛文年間（一六六一～七三）と推定されるが、Ｅ３はずっと下って弘化四年（一八四七）の刊行だが、物之本屋の刊記がそのまま残る。Ｅ２ではそれが削られて八文字屋仙治郎と炭屋文蔵の刊記が入れられていたが、この八文字屋とは石門心学者の脇坂義堂（？～一八一八）である。

またＦ１は小川多左衛門の刊行で、刊記は見られないが、表紙裏見返しの『禅機繪抄』の広告に「安政六年仲秋」とあり、安政六年（一八五九）刊行とわかる。しかしＦ２には広告がなく無刊記なので、Ｆ１とは区別した。

### （３）平仮名本と片仮名本のいずれが先行するか

以上ここまで『麓草分』の平仮名本と片仮名本を検討し、平仮名本がＡ～Ｃの三系統、片仮名本がＤ～Ｆの三系統あることが確認できた。その結果、現時点で判断される平仮名本の初刊は村上平楽寺板で、片仮名本では堤六左衛門板がもっとも古いことが判明した。次に問題となるのは、村上平楽寺板と堤板のいずれが先に刊行されたかであるが、平仮名本と片仮名本を対校すると、いずれが先行するか、容易に判断がつくのである。

『麓草分』は平仮名本も片仮名本も一七段からなるが、例えば平仮名本の第一一段「不レ可レ忘二自己一事」の下巻四丁裏～五丁表は、同六丁表～裏の部分と全く重複するくだりがあり、片仮名本に後で加筆が行われたものと見てよいと思われる[17]。平仮名本の第一四段「吊二亡者一有レ

得失事」の下巻一二丁表〜裏も、片仮名本への加筆とみられる部分があり、第一六段「非人施物事」の下巻一三丁裏〜一六丁表のくだりも、片仮名本を全面的に書き改めたものと見られるのである。

以上、平仮名本と片仮名本を対校すると、先に片仮名本が成立し、それに加筆修正した形で平仮名本が成立したことが明瞭に見て取れる。『国書総目録』は『麓草分』を二巻二冊としていたが、一巻本の片仮名本のほうが先に刊行されていたのである。

しかし本稿ではなお解決のできなかった問題もある。私はこれまで『麓草分』の写本を一点把握しているが、禅文化研究所所蔵の片仮名本『麓草分』（請求記号Z五―八四八）の奥付には「明暦二年弥生上旬／良傳也」という書入れがあり、この写本は明暦二年三月に成立したと見られるが、その年代は平仮名本の村上平楽寺板の刊行に先立つものである。ただこの片仮名本は二巻本で、本稿で所在を確認した片仮名本の二巻本であるE・Fの二系統といかなる関係にあるかは明確な結論が出せなかった。以上のことからここでは、今後は片仮名本の写本の研究が『麓草分』の成立を考える上で極めて重要な意味を持つと思われることを提起するにとどめたい。

## 三、『破吉利支丹』の諸本

### （1）正三と天草

『破吉利支丹』の成立の契機を記した最も古い史料である『驢鞍橋』によれば、「破キリシタンハ天草一乱ノ後舎弟三郎九郎ニ御代官仰付有リシ時、師モ共ニ至リ邪宗ノ習氣ヲ滅シ、其ノ土ヲ治メント欲シテ寺庵数多建立シ給フ。其ノ因ニ是ヲ書シテ其ノ土ノ者ニ示シ給フ也」（同書下巻四九丁裏）とあり、さらに『行業記』は次のように伝える。

「同〔寛永〕十九年壬申、重成吏二于肥後天艸故戰場一。師飛錫至レ彼、謂レ成曰、這地邪宗泛濫之跡也。造二佛宇一弘二正法一、則治教休明。成諾訟二之大府一、乃賜二三百斛一。建二三十二宇一、頒レ賜悉充。中構二浄土一宗一、立二此東照宮・臺德院殿尊牌一。餘皆爲二洞宗一也。師書二破幾利支丹壹本一、而挈レ毎レ寺、誓三永斷二邪教一。駐レ錫三年、廻經二長崎一反」(18)

寛永一四年（一六三七）から翌年の島原の乱後、天草は天領になるが、その初代代官となったのが正三の実弟重成である。正三は重成の後を追って天草に行き、仏寺を建立して正法を広めるよう説いた。重成は幕府に上申して寺領三〇〇石を下され、それをもとに三二の仏寺が建立されたが、浄土宗の一寺の他はすべて曹洞宗とされた。また正三はかの地で『破吉利支丹』を著し、右の諸寺に納めたとされる。こうした右の記述は『鉄心全集』ではほとんど疑われることなく「史実」として扱われてきたが、研究の進展によって、疑問視され始めた点もある。

例えば若木太一は天草の諸寺を調査し、重成代官の時代に建立されたのは曹洞宗一一、浄土宗七、真言宗一の計一九か寺で、他に飛龍権現と諏訪宮という二つの神社が再建されたとした[19]。また若木に私が聞いたところ、天草の諸寺を調査する際に『破吉利支丹』など正三の著作や関係資料がないか調べたが、そうしたものはほとんど発見できなかったとのことで、ここにも『行業記』の記述と現実との食い違いが見られた。

ところで正三の天草での活動を記した史料を探すにあたり注目されるのが『近代年譜』の「鈴木神社祭神家系譜」の次の記述である。

「寛永十八年九月、舎弟重成、島原陣後に於ける荒廃の地開發の使命を帯び、天草代官として赴任するに當り、切々の懇望もだし難く、翌十九年九月遙々天草に飛錫し、志岐村に國照寺を創建、開基して居る。

猶重成をして外に佛寺二十一宇を新建、幕府に寺領三百石を請はしめしも彼の進言するところ、又破邪の冊子をものし、土民に頒ちて正法に據らしむる等、日夜郡民の教化に腐心し、大いに治教の實を揚ぐ。

天草に駐ること三年、正保二年發つて長崎に至り、彼の地皓泰寺一庭に託するに後事を以てし、其の足にて歸山の途に就く。

慶安元年夏、江戸に出でゝ更に教義の奥を究め、悟道の妙を極む。此冬天草に開基せる志岐村國照寺の工全く成り、一庭之れに入院すと聞き、再び天草に下り進山の式に參列するあり、其の儘富岡に滞留越年し、仝二年夏歸府す」[20]

右の引用は「鈴木神社祭神家系譜」に基づくが、『行業記』と異なる記述も含まれ、大変興味深い。しかし同系譜がいつ頃どのようにして成立した史料であるかが不明なため、この記述をそのまま信用してよいかどうか問題が残る。ただ近年刊行の『天草代官鈴木重成鈴木重辰関係史料集』は鈴木重成と重辰（正三の実子で重成の養子）が天草代官を務めた時期の史料を収集したもので、『近代年譜』の記事を確認する貴重な手がかりを与えてくれる。

それによれば、『行業記』は正三の天草来島を寛永一九年とし、『近代年譜』は同年九月としたが、天草には正三の来島を裏付ける信頼性の高い史料が発見されていない。ただ『近代年譜』には慶安元年（一六四八）冬に国照寺の進山式に正三が参列した事実が記され、これは『行業記』に見られない記述だが、正三開基の国照寺の史料からも確認された[21]。

右の点を考えると、『近代年譜』は正三の天草来島を寛永一九年から正保二年までの第一回と、慶安元年冬から翌二年夏までの二回目とがあったとしたが、現時点では第一回の来島を裏付ける確実史料が未確認で、確認できるのは二回目の来島のみということになる。それゆえこれまで『破吉利支丹』の成立を寛永一九年頃と推定してきた通説にも疑問が生じるわけで、その成立は実は二度目の来島とされる慶安元年から翌年だったという可能性も浮上したのであるが、この問題はなお慎重な検討を要するように思われるのである。

## （2）諸本の成立とその影響

『破吉利支丹』の諸本の研究はこれまで何度かされたが、『仮名草子集成』の解説によれば、「本書は、寛文二年堤板以下、求板など、五種あるが、八行本と十二行本とに分れることが、判明している」とし、八行本の堤六左衛門板四点、山本平左衛門板二点、丁子屋九郎右衛門板二点、柳枝軒小川多左衛門板三点を提起し、また一二行本一点の存在が報告された[22]。しかしこの解説も参照された史料の数が少なく、いま改めて諸本を探索し、新たな研究を提起する意義があると思われる。ここでは『国書総目録』を出発点に全国の大学・図書館に所蔵する『破吉利支丹』を探索し、諸本の分類・整理を行い、正三の生存年代に近い刊本を明らかにしたい。

同目録によれば、写本七点、刊本二六点の所蔵先が示されるが、私はそのうち写本三点、刊本二〇点の所在を確認し、原本を実見した。まず正三の真筆本を探すという見地から写本について記すと、文政九年（一八二六）写の宮内庁書陵部本、享和三年（一八〇三）写の京大内田文庫本、寛文二年（一六六二）刊の堤六左衛門板の写本である東大総合図書館本の三点のほか、昭和九年（一九三四）写の立教大学海老沢文庫本を確認した。次に同目録にあるが未見の写本四点の書誌情報を可能な限り記すと、筑波大本は享和三年（一八〇三）胡杏花是誌とあり、市立米沢図書館林泉文庫本は元禄一三年（一七〇〇）因泰の写、さらに徳川斉昭編の『息距編』にも収録とされるが、戦災で焼失した礫川文庫本だけは情報が得られなかった。いずれにしても現時点では、正三の自筆本は確認されていない。

次に刊本についてであるが、原本を実見する作業を積み重ねた結果、私は以下の【図3】の如く四〇点の刊本をA～Cの三系統に分類した。

『仮名草子集成』の解説でも指摘されたが、A1の堤板が初刊本と見られ、A2の山本板は堤板の求板で、無窮会神習文庫本もA2に分類される。ところが柳枝軒小川多左衛門板はA3・A4・A5という三種が確認され、刊記はすべて「寛文二年中春吉辰子」とあるだけで、本来あった書肆名は削られていた。

A3は奥付に「京師六角通寺町西江入町／禪家書林　柳枝軒　小川多左衛門刻」とあるが、A4は奥付がなく、一九丁裏に「京師六角通寺町西／書林　小川柳枝軒」の印記がある。だがA5は奥付と印記が両方あるので、他とは区別した。さらに小川多左衛門にはA6の如く小川彦九郎との共同刊行の例もある。

次にA7の丁子屋九郎右衛門板は、海老沢有道によれば「幕末になって丁子屋の『新刻破鬼理死端』があ」[23]るとされ、刊年だけ残して奥付に「京東六條下珠町／真宗書房　丁子屋九郎右衛門」とある。さらにA8は『石平道人七部書』に収録の一冊であるが、これは別々に刊行された七部書を寄せ集めただけで、刊記に「寛文二年中春吉辰子」とあるが、書肆名はない。堤板と山本板を除き、刊記の書肆名は削除されるのが一般的である。

右の如く、現存する『破吉利支丹』は堤六左衛門板を初刊とするA系統のものが圧倒的に多い。その中でB系

【図３】『破吉利支丹』の諸本

| 分類 | 書肆／刊行年月 | 丁数 | 所蔵先(請求記号、旧は『国書総目録』) |
|---|---|---|---|
| (A1) | 堤六左衛門／寛文二年二月 | 一九丁 | ①早稲田大学図書館(ハ―七―四〇二三) |
| | | | ②大正大学図書館(一〇九一―四五―一) |
| | | | ③立教大学図書館海老沢有道文庫(三三―HA) |
| | | | ④国立国会図書館(わ―一八〇―五) |
| | | | ⑤東洋文庫岩崎文庫(三―DC―三) |
| | | | ⑥お茶の水図書館成簀堂文庫 |
| | | | ⑦神宮文庫(一七一三) |
| (A2) | 山本平左衛門／寛文二年二月 | 一九丁 | ⑧一橋大学附属図書館明治文庫(一一八〇六九六三三):文政丙戌9月 |
| | | | ⑨香川大学図書館神原文庫(一八四―一) |
| | | | ⑩駒澤大学図書館(一九八―四二) |
| | | | ⑪早稲田大学図書館(ハ―七―一〇〇四) |
| | | | ⑫無窮会専門図書館神習文庫(一―一五〇一) |
| | | | ⑬大倉精神文化研究所(ウ三―四六六 |
| (A3) | 小川多左衛門／寛文二年二月 | 一九丁 | ⑭東京大学史料編纂所(一〇一九―一二) |
| | | | ⑮東京大学史料編纂所(押小路本、押―は―二) |
| | | | ⑯上智大学中央図書館キリシタン文庫(KBS―一八九―六) |
| | | | ⑰関西大学総合図書館(L二一／三―四〇四) |
| | | | ⑱京都府立総合資料館(和―二七〇―五) |
| | | | ⑲草間文庫 |
| (A4) | 小川柳枝軒／寛文二年二月 | 一九丁 | ⑳香川大学図書館神原文庫(一八四―二) |
| | | | ㉑聖心女子大学図書館(一九〇・二―Su九六h) |
| | | | ㉒豊橋市中央図書館橋良文庫(旧橋良、A一九〇―二) |
| | | | ㉓草間文庫 |
| (A5) | 小川柳枝軒・小川多左衛門／寛文二年二月 | 一九丁 | ㉔皇學館大学神道文化研究所原田敏明先生旧蔵毎文社文庫(五六一) |
| (A6) | 小川多左衛門・小川彦九郎／寛文二年二月 | 一九丁 | ㉕金沢大学附属図書館(二―九四一―六) |
| (A7) | 丁子屋九郎右衛門／寛文二年二月 | 一九丁 | ㉖東北大学附属図書館狩野文庫(二―三九五五―一) |
| | | | ㉗駒澤大学図書館永久文庫(旧永久俊雄、七四七一) |
| | | | ㉘筑波大学附属図書館(ハ六〇〇―八〇):安政5年？ |
| (A8) | 無刊記／寛文二年二月 | 一九丁 | ㉙京都大学附属図書館(四〇―セ―一、『石平道人七部書』の一) |

| | | | |
|---|---|---|---|
| (B) | 無刊記／ナシ | 一二丁 | ㉚天理大学附属天理図書館（一九〇・四―イ―七） |
| | | | ㉛西尾市岩瀬文庫（一四五三六―一四〇―一七三） |
| (C1) | 北畠（須原屋）茂兵衛／明治二二年一二月 | 一七丁 | ㉜大谷大学図書館林山文庫（外大六七八〇―一） |
| | | | ㉝上智大学中央図書館キリシタン文庫（KBS―一八九―一二一） |
| | | | ㉞立教大学図書館海老沢有道文庫（三三―SH） |
| | | | ㉟関西大学総合図書館（LM二／に／三―三） |
| | | | ㊱大倉精神文化研究所（ウ三―四六七） |
| | | | ㊲松ヶ岡文庫（クハ―五八五） |
| | | | ㊳草間文庫 |
| | | | ㊴恩真寺 |
| (C2) | 北畠（須原屋）茂兵衛／明治二二年一二月 | 一七丁 | ㊵豊橋市中央図書館橋良文庫（旧橋良、A一九〇―二） |

統は二点しか確認できないが、A系統が八行一九丁本だったのに対し、B系統は一二行一二丁の無刊記本である。書誌学では一般的に、再刻となるほど行数が増えるとされるので、B系統は堤板の後の刊行と見るのが妥当と思われる。

最後にC系統であるが、これも『麓草分』や『万民徳用』とほぼ同時期に刊行された明治期の刊本で、和装本である。C2にはC1にない内表紙があるので区別したが、共に北畠（須原屋）茂兵衛の刊行である。

以上の検討によって、正三の『破吉利支丹』は寛文二年の刊行後、A系統を中心に流布し、無窮会神習文庫本はその中で最も流布した山本板の一つであることが明らかとなった。ただ近世における影響という点から見れば、仮名草子作家の浅井了意（?～一六九一）が著した『鬼理志端破却論伝』のことを忘れてはならない。私は京大附属図書館所蔵の山田市郎兵衛板を実見したが、同書の下巻には『破吉利支丹』の全文が収録され、了意自らによる注釈と正三伝が付されている。このように正三の『破吉利支丹』は、近世における仏教とキリスト教の論争書として、後世への思想的影響を垣間見ることのできる興

味深い著作であると言えよう。

## 四、結

ところで戦後、仏教学者の中村元は『破吉利支丹』のキリスト教批判に着目し、その批判を①「西洋においてすでに發せられている論難」と②「佛教の立場にもとづく批判」と③「正三の批判の特徴」の三点から検討し、①については「…近代西洋の思想家や哲學者が、キリスト教に對して發してゐる論難を、正三も、かれらと無關係に日本において發してゐるのである。ここにも思想家としての正三の近代的性格を認めることができる」とし、②については「鈴木正三は、近代―西洋の自然科學は知つてはゐなかつた。かれの立論は今日のわれわれからみると『前―自然科學的』である。しかしかれはともかくどこまでもその時代としては合理主義的立場に立つて論爭しようとつとめてゐたことは明らかである」とし、③についても「正三は、年代的には菅茶山や新井白石よりも以前であるにもかゝはらず、新井白石のやうな進歩的思想家のキリスト教排斥論の立場がなほ封建的であつたのに對して、正三のそれは無意識のうちに近代的な合理主義的な立場に立つてゐたのである」[24]とその「近代的性格」を高く評価した。

これに対しキリシタン史研究者の海老沢有道は「本書（破吉利支丹）について中村博士は思想史的論究をなされ、正三の論駁にすぐれた合理的精神の存在を求め、近代的性格を主張されている。しかし博士が分析された『仏教の立場にもとづく批判』は仏教的因明論の程度にも及ばないし、『西洋においてすでに発せられてゐる論難』に無関係に正三が同様の論難をなしたにしても、それらは西洋における近代的合理精神からではなく、初代教会以来異教哲学者らによって唱えられたところであり、それとの偶然的一致の故に正三の意識が近代的合理主義であるということは到底許されないと思われる」とし、「正三は封建社会そのものの内包し、今や露呈されつつある問題を意識していたとは受け取れないし、その思想は中村博士も認められるように前自然科学的であり、禅儒的観念から一歩も出るものではなかった」[25]と中村の所説を批判し、「『破吉利支丹』においては、キリシタンの教理・倫理的本質に対して殆ど全く理解を欠いている」[26]と断

定した。

その後中村は自らの正三研究を『中村元選集・七』（春秋社、一九六五年）や晩年の『中村元選集〔決定版〕別巻七』（春秋社、一九九八年）に収録した。ところが中村の所説は海老沢の批判をいわば無視し、反論することも修正されることもなかった。こうした点を考えると、中村の所説はあらためて再検討されなくてはならない課題を多く含んでいるように思われるのである。

これまでの正三研究は、大きく二つの立場から行われてきた。すなわち七部書という正三の著作に注目する立場と、語録の『驢鞍橋』に注目する立場とがそれである。前者はさらに『万民徳用』を中心に展開された仏教的職業倫理、『破吉利支丹』で展開されたキリスト教批判、片仮名本『因果物語』や『二人比丘尼』『念仏草紙』等の仮名草子に注目した研究などに分かれるが、最近の正三研究の進展によって、『驢鞍橋』で展開された「正三派」の仁王禅の活動は、その実態が徐々に明らかにされつつある[27]。近世から近代に至るまで刊行が継続された正三の著作や語録がいかにして流布し、当時の人々にどのように受容されたか、本稿の試みはその一端を明らかにしえたに過ぎないが、こうした試みの積み重ねが新たなる正三像を形成する上で決定的に重要な意味を持つようになると思われることを最後に提起し、本稿を終えることにしたい。

【注】

(1) 三田村鳶魚『三田村鳶魚全集・一四』中央公論社、一九七五年、六一頁。

(2) 関西大学総合図書館蔵『石平道人行業記辨疑』一九丁表。カッコは引用者。

(3) 久多羅木儀一郎・中村壽徳・小手川又吉編『高田村志』双林社、一九七八（初版二〇）年、一四〇～一四一頁。

(4) 拙稿「『万民徳用』と鈴木正三」『仏教文学』第三三号、仏教文学会、二〇〇九年、一〇一頁。その後、出雲寺文次郎以下の七書肆の共同刊行の例として慶應二年（一八六六）補刻『三賢一致書』があり、鷲尾順敬編『日本思想闘諍史料・五』（名著刊行会、一九六九年）に収録されることを確認した。

(5) 拙稿「『盲安杖』と鈴木正三」『仏教文学』第三五号、仏教文学会、二〇一一年（予定）。

(6) バークレー三井蔵『驢鞍橋・下』万治三年堤六左衛門板、

四九丁表〜裏。

(7)『驢鞍橋・上』九丁裏〜一〇丁表。

(8)鈴木鉄心編『鈴木正三道人全集』山喜房仏書林、増補版一九七五年、三三一頁。

(9)『石平道人行業記』元禄一〇年板、七丁表。傍点は引用者。

(10)愛知学院大学図書館蔵『続日域洞上諸祖伝・四』正徳四年象王林蔵版、七丁表。

(11)『続日域洞上諸祖伝・四』七丁裏。

(12)拙稿「鈴木正三の仁王禅とその展開」『日本思想史学』第四一号、日本思想史学会、二〇〇九年、一一五〜一一六頁。

(13)松田唯雄『天草近代年譜』国書刊行会、一九七三年、四五頁、四七頁。

(14)慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成・一』井上書房、一九六二年、四六頁、七六頁、一二八頁。

(15)前掲拙稿「『万民徳用』と鈴木正三」『仏教文学』第三三号、一〇〇頁。

(16)朝倉治彦・柏川修一編『仮名草子集成・二五』東京堂出版、一九九九年、二五一〜二五二頁。朝倉治彦・深沢明男編『仮名草子集成・一三』東京堂出版、一九九二年、二六九〜二七一頁。

(17)村上平楽寺板の平仮名本『麓草分』の重複部分は「(自己を忘れぬ人と)して念佛を用る人あり或ハ観念観法を用る人或は座禅工夫を用て初学の輩に至まで一向に禅定をあたふる人あり或ハ祖師の活法にホこり向上の言句を用て在家の男女にいたるまで見性成仏を授くる人有其品々多途ありといへとも佛祖の本意に相應して有意の法を去て無上菩提に至べき願力を以候て修行する人稀也誠の道心といふハ初学より三界出離を強く守て離相離名に住し有相執念の念根を截断して虚空同体となる修行者を可也とす此外為何殊勝をあらハす共皆以虚妄なるべし古人云發心不正万行空施といへり然る間大力量を具する古人も難行難解と云々然るに近年邪解を用人在候て途俗男女に至まで悟を安く授て人をそこなふ類有縦へ少見解有といふとも着相の盡す事かたし況や自己の修行もなき人の(といふ也)」のくだりである。

(18)『石平道人行業記』七丁裏〜八丁表。

(19)若木太一「鈴木正三の思想と教化」『九州大学・語文研究』第三一・三二号、九州大学国語国文学会、一九七一年、一四四〜一四五頁。

(20)『天草近代年譜』七五二〜七五三頁。

(21)田口孝雄・鶴田倉造・寺沢光世・平田豊弘・本多康二編

『天草代官鈴木重成鈴木重辰関係史料集』鈴木神社社務所、二〇〇三年、二二四頁。

(22)『仮名草子集成・二五』二五一～二五三頁。

(23)海老沢有道・他校注『日本思想大系・二五―キリシタン書・排耶書―』岩波書店、一九七〇年、六三九頁。

(24)中村元『近世日本における批判的精神の一考察』三省堂、一九四九年、二一二～二三八頁。傍点は中村、傍線は引用者。

(25)海老沢有道『南蛮学統の研究』創文社、一九六六年、二六五～二六七頁。

(26)海老沢有道『日本キリシタン史』塙書房、一九六六年、二〇九頁。

(27)前掲拙稿「鈴木正三の仁王禅とその展開」『日本思想史学』第四一号。